

悪徳と陰謀論

飯塚 理恵 (Rie Iizuka)

関西大学総合情報学部・日本学術振興会特別研究員 P D

本発表では、三つのことを目指す。まずは、陰謀論的思考 (Conspiracy Mentality) を悪徳として理解していく。次に、悪徳としての陰謀論的思考が倫理的な悪徳と認識的悪徳の両側面を持つハイブリット型の悪徳として理解できることを示す。最後に、陰謀論的思考に対する個人の徳と組織の徳という二つの種類の徳の涵養の必要性を説く。

近年英米圏の認識論の中で認識的悪徳についての研究が始まった。認識的徳は、認識的善への安定した動機づけとそうした動機づけから生じる行動傾向性であるとされる (Zagzebski 1996)。従来、悪徳はそうした徳の反対であると述べられるに留まり、適切な注意が向けられてこなかったが、Crerar(2017)は徳と悪徳の非対称性を挙げ、悪徳が徳よりも広範な現象を含んでいることを指摘した。認識的悪徳の特徴づけはいくつかの仕方で行なわれているが、中でも最も広範な定義は Cassam(2016)による、効果的な探求や責任ある探求を邪魔するような認識的性格を悪徳とする、というものである。まずは、悪徳と徳の構成要素の相違点を示しながら、陰謀論的思考が悪徳の一つとして理解されるべきであると論じていく。

次に、悪徳としての陰謀論的思考が、ハイブリット型の悪徳であることを示す。Fricker(2007)は、認識不正義が、認識的な不正と倫理的な不正の両方を本質的に含む現象であることを描き、そうした二種類の不正を為す不正義を中和する認識的な徳としての認識的正義もまた、認識的な徳かつ倫理的な徳というハイブリット型の徳であると論じている。そこでハイブリット型の徳とは、真理という認識的善と、正義という倫理的な善の二つの善の実現を同時に目指すものなのである。陰謀論的思考は、証拠への感受性の欠如など、認識的観点から批判されることが多かった。しかし、Cassam(2019)が近年指摘するように、単なる陰謀を含む話と区別される、陰謀論 (大文字の陰謀論) の持つ独特の頑固さは、認識的なエラー (例えば、人間一般が持つ認知バイアス) だけでは説明できない。そうした頑固さには、陰謀論が本質的にプロパガンダである点が重要な仕方に関わっている。すると、陰謀論的思考は、認識的な善に動機づけられていないばかりか、非難に値する倫理的動機が背後にあるという考えを真剣に検討する必要があるだろう。このように、認識的不正義のハイブリット型の不正 (および、それに対するハイブリット型の徳) の分析を参考に、陰謀論的思考がハイブリットな悪徳である可能性を検討する。

最後に、陰謀論的思考をハイブリットな悪徳として考える時、どのような徳の涵養が必要なのかという点を考察する。個人が認識的徳を涵養することの重要性は徳認識論の発展によって注目されてきたが、近年、組織が徳を持つことの重要性が繰り返し叫ばれている (Anderson 2012; Fricker 2010; Medina 2013)。こうした立場は、ナッ

ジヤパターナリスティックな介入を通じて、個人の徳の獲得を促進する良い環境を整備するという観点から組織のあり方に言及することに留まらない。組織がエトス（価値）を有し、組織の成員はそうした組織のエトスに加担しているというアイデアに基づき、組織自体が認識的に善い（または悪い）性格を有すると言うのである（Fricker 2019）。発表の最後では、陰謀論的思考に陥らないためには、個人の判断の精緻化やその支援だけでなく、組織も陰謀論に抵抗する徳を涵養しなければならないと論じていく。